

ハイデラバード見聞録

小野 勝彦

神経発生生物学教室

平成 26 年 11 月 25 日から 28 日の間、インドのハイデラバード大学で開催された、International Conference on Frontier in Comparative Endocrinology and Neurobiology 2014 (IC-FCEN 2014)に参加しました。欧米諸国への渡航の機会と比べると、なかなかインドに行く機会は少ないのではないかと思い、旅行記のようなものを書かせていただきます。ただ、初めてのインドでありハイデラバードのみ、しかもたかだか3日の滞在ですので、話半分いや1/5程度に読んでいただければと思います。

I. ハイデラバードに行くことになったいきさつ

学会の Organizing Committee メンバーの Senthilkumaran 教授 (図 1) が、私が以前いた生理学研究所分子神経生理部門 (池中一裕教授) の共同研究者で、私とも 3 ヶ月オーバーラップしていたことから、声がかかったのだらうと思います。Senthilkumaran 教授は、魚類の生殖腺形成が専門ですが、池中ラボには糖鎖解析の研究で来日されていました。1 月後半にメールで声がかかって、即 OK の返事をしました。当時、Olig2 による神経回路制御の論文が後一步というところだったので、発表する内容は十分な手持ちがありました。それ以上に、インドに行く機会はあまりなさそうだったのでとにかく行ってみたいやろうという、そういう好奇心も即答の理由の一つです。また、一緒に招待されている池中先生はすでにインドに 5 回も渡航されており、一緒に行けば苦労しないだらうという邪な気持ちもありました。

II. ビザ取得とハイデラバードまで

5 月頃に池中先生より、インド渡航にはビザが必要と連絡を受け、ただしビザの有効期間は六ヶ月ということで、夏休み中の 8 月に準備を始めました。インド大使館の HP にも申し込みするサイトがありましたが、大阪の領事館まで行く必要があるので、



図1 IC-FCEM2014のcommitteeメンバー
右端が Senthilkumaran 教授

インドビザ取得の代行業者に依頼しました。必要なものの中に「明るい背景の顔写真」があり、写真館で「パスポート用の写真」として青色の背景で撮影し、パスポートと一緒に業者に送りました。翌日に代行業者から電話が有り、「明るい背景とは白の背景ということで青色の背景では受け取ってもらえないかもしれない」とのこと。

受け取ってもらえなければ手数料が倍かかるので、仕方なしにまた別の写真館で撮り直して送りました。インドのビザには白い背景の写真が必要です。

ハイデラバードへは、シンガポール経由とバンコク経由とがあるそうですが、後者で行きました。京都→関空→羽田→バンコク→ハイデラバード、です。関空を朝の8時10分発、ハイデラバード着が真夜中の午前0時30分。さらに帰国はハイデラバード午前1時30分発（もちろん真夜中）、関空には午後9時50分着という、なかなか体験できないスケジュールでした。京都駅を朝4時30分に関空に向かうバス、さらには午後11時以降にも関空から京都に向かうバスがあることにもちょっと驚きました。ハイデラバード空港ではこんな時間でもレストラン・売店は開いています。

バンコクでは5~6時間の待ち時間が有り、当初の予定では市街に出て夕食をとることにしていました。出国の時に、関西空港で聞いたところ何も手続きしていなくても市街地に出ることができると言われましたが、バンコクの入国審査で「出ることはできない」と足止めをくらい、空港内でブラブラする羽目になりました。期待していたタイ料理は、空港のレストランでいただきました。ただ、同じ学会に来ていた別の日本人グループは市街に出ることができたということで、「??」という感じでした。

III. なかなか来ないプログラム

今年（平成26年）の8月・9月は教養キャンパスの下鴨への引越しとその後片付けなどがありバタバタしていましたが、10月になると英語がへたなこともあり、そろそろ発表の準備をしなければ、と思うようになりました。何度か、学会本部に「発表はいつでしょうか」とか「何分間の発表でしょうか」と問い合わせしましたが、なかな

か返事はありませんでした。事情通の話では、昔はインドの人は学会には列車で会場に行きその列車が日単位で遅れることがあったそうで、当日の朝に会場にいるメンバーをみて発表する人（つまりプログラム）を決めたこともあったということでした。そういうことで池中先生からは、発表は30分バージョンと45分バージョンの2つを準備するように言われていました。今では、インドの皆さんも国内の移動に飛行機を使っているそうですが、そういう昔の雰囲気が残っているのかもしれませんが。ようやく発表に関する返事が来たのは、インドに出発する前の週でした。20年前にアメリカにいた頃に、インドの人の英語はなかなか聞き取りづらかった記憶があります。また今回もハイデラバードの street では、欧米などを旅行するときよりは聞きづらい印象はありました。しかし、最近では欧米の大学・研究所に留学して帰国した PI.が多いようで、学会の講演での英語ではそういったことはありませんでした。むしろ私の英語はどうだったのか、気になるところです。

IV. ハイデラバード大学

招待された日本人は、私を含めて7人でした。池中先生と私が **Neurobiology**、あとの5人は **Comparative Endocrinology** で魚類の生殖腺形成・性分化がご専門の先生でした。皆、**Senthilkumaran** 教授の知り合いで、先生の日本への人脈の広さはなかなか幅広いものでした。全員、同じ **Radison** ホテルに宿泊しました。ホテルの中はほとんど欧米という感じの広くきれいなホテルでしたが、入る車はゲートの外で車の底面の（爆弾？）チェックと麻薬犬のチェックを受けていました。麻薬犬は、愛想のいいラブラドルレトリバーでした。学会場はハイデラバード大学生命科学部（**School of Life Science**）でした。学会を主催された生命科学部の各研究室では、基本的な実験機器（培養機器、サーマルサイクラー、顕微鏡と撮影装置など）は揃っており、**publication** もコンスタントにあります。サイエンスは一定レベルにあり、**potential collaborators** であることがよくわかります。うかうかしていると、そのうち追い越されるのではないかという熱気も感じました。



図2 大学の建物から見るキャンパスの一部とにかく広大な敷地。低木の林が広がっており、写真では見えませんが遠くには牛や馬がのんびりしています。

朝夕は、学会が手配した車で大学とホテルを往復です。大学の正門の正門を超えても、そこから生命科学部の建物まで車で15~20分かかるただ広いキャンパスで、その中に低木の林が広がっていました(図2)。いったん学会場に入ると途中で外に出る機会は、学会による excursion 以外にはありませんでした。うっかり出歩くと迷子になりそうですし、また以前、池中先生がハイデラバード大学の guest

house に泊まれたときには、「夜、出歩くときには毒蛇に注意するように」と言われたそうです(どうやって注意すんねん、という突っ込みがありました)。好奇心旺盛な私も、一人歩きはひかえましました(おかげで無事帰国できました?)。

V. ハイデラバードの街と交通事情

ハイデラバードの紹介が少し遅れましたが、人口800万人でインド第4の都市です。IT産業がさかんだということで、HITEC CITY という別名があるそうです。11月の終わりでも昼間の日差しは強烈でしたが、標高500m程度で、乾季のため夜は涼しくあまり汗をかくことはありませんでした。

ハイデラバードの交通事情について少し見聞きしたことを紹介します。車はイギリス統治のなごりで日本と同じ左側通行です。ハイデラバードの道路には信号は非常に少なく、全ての車は始終クラクションを鳴らしながら、おそらく自分の車の存在を周囲に知らせめながら、道路を右に左に運転していました。交通量は非常~に多く、4月と11月の河原町通りより多いかもしれません。しかし、インド的合理性なのか、車はとにかく前進、前進、また前進で、あるときはノロノロ、あるときはスピードを出して、車の流れが止まることはほとんどありませんでした。クラクションはホテルの11階にも十分響く大きさと量で、朝早くから夜遅くまで聞こえていたのには少し閉口しました。そういう意味で、道路の中央分離帯は非常に重要で、これがないと道路はさらにカオスになるのではないかと思います。かなりきっちり分離帯がありまし

たが、道路を逆走する車を2回見ました。

横断歩道は信号よりさらに少なく、地元の人是非常に多い車をさらに縫うように横断しています。私も一度、ホテルからスーパーマーケットに行くため夕方のラッシュアワーの道路を1往復しましたが、タイミングがつかめず非常〜に怖い思いをしました。怖くて二往復目の横断はありませんでした（おかげで無事帰国できました！）。

昔のオート三輪に似た黄色の mini-taxi がたくさんありました。地元の方は、小中学生までよく使っているようでした。taxi というわりには、メーターはほとんど off になっているようでした。同じラボのアジア好きの後藤君によると、この mini-taxi に乗るには値段交渉が必要で、大概倍の値段をふっかけられてそれを半値に値切って目的地まで連れて行ってもらうと、再び倍の値段を要求されまた半値まで値切って支払いをするのだそうです。近い距離なら、歩いたほうが安全で早いかも知れないと言っていました。ちなみに、このオート三輪に似た乗り物は、基本的にはオートバイのようで、バックはできず後ろに進むには運転手が人力で引っ張って動かしていました。後藤君とインドに行く機会があれば、ぜひ一緒に乗ってみたいと思います。

インドの street には、物乞いをする人がいましたが、20年前と比べると非常に少なくなっているそうです。足の不自由な人は、コロのついた板に乗って、ラッシュアワー状態の道路の真ん中を、やはり縫うように行き来して物品を求めていましたが、車に轢かれぬか、見ている私のほうがハラハラしました。また、今では日本ではほとんど見られなくなった、野良犬が多く見られました。狂犬病に気をつけるように、という注意を読んだ記憶がありますが、ほとんどの犬は大人しいようで、人に近づくわけでもなく道路脇でねそべったりうろついたりでした。もちろん、道路脇を悠々と散歩する牛も見ましたが、犬と比べるとごくわずかでした。

VI. 水事情、カレー、ビールほか

インドに行くことになったとき、その水事情については日印混血の従姉妹を含めていろいろな人から注意を受けました。念のため2Lのペットボトルを1本持って行きました。しかし、学会場などでは細かにペットボトルの水が提供されており水持参の必要は全くなく、大きな問題はありませんでした。少し油断して、現地の水を飲んだり生野菜を口にしたりしましたが、とりあえずお腹の調子に問題は起きず、用心のため持っていった正露丸糖衣錠の出番はありませんでした。



図3 学会の懇親会

並んでいるのは全てカレーとご飯、ナン。カレー好きにはたまりませんが、アルコール飲料はなく、ひたすら食べるのみでした。

食事は、三食全てカレーの三日間でした(図3)。カレーは非常にバラエティーに富んでおり、飽きずに楽しむことができました。中に入っている「具」は、豆などを中心とした野菜かチキンでした。これを、ナンにつけるかパサパサの長いご飯にかけて食べますが、これらに非常にマッチして食べ過ぎたくらいです。煮魚やフライにした魚も

出ていましたが、おそらく鯰か鯉の仲間だろうと思います。淡水魚独特の泥臭さがあり、苦手な人もいるかもしれません。カバブを楽しみにしていましたが、インド北部の料理のようで、全く出なかったのが残念でした。

ビールは、Kingfisher という名前でいい味です。値段は、ホテルのバーでは200ルピー、部屋のミニバーでは100ルピーでしたが、街のwine shopに行くことができず、本来の値段を知ることができませんでした。空港やホテルでの換金レートは1ルピー2円強でした。ビールの小瓶が400円というのはむちゃくちゃ高いことに、これを書きながら気づきました。

トイレは全般的に、といっても大学と excursion でいった観光地を見ただけですが、非常に清潔でした。話に聞いたとおり、大学のそれには紙はありませんでした。そのかわり、各個室の中に水道の蛇口と手桶があり、「なるほど、これに水を汲んで左手を使ってきれいにするのだな」、と思いましたが、不器用な私は日本から持参した流せるティッシュを使いました。もちろんホテルのトイレには紙はありました。

以前にインドに行った先生が持って行かれたというアルコールジェルとマイスプーンも持って行きましたが、出番はありませんでした。

VII. ちょっと心残り

サイエンスの話は割愛してもらいましたが、発表内容の一部は本号の別稿(p.63)

をご覧ください。こんな具合になかなか印象深い3日間、往復も入れると5日間でした。いつものことですが、タイトな学会スケジュールで観光は学会主催の excursion 以外にはできませんでしたが（観光しないのはあたりまえだろうというツッコミが入りそうです）、それ以上に、①mini-taxi に乗れなかったこと、②スーパーマーケットでインドの本場のレトルトカレーを買い忘れたこと、③Kingfisher ビールの現地の値段がわからなかったこと、④評判の良い「Himaraya のかかとクリーム」が見つからなかったこと、などなど心残りが多くあります。機会があれば、また行ってインドの研究者と交流を深めるとともに、もう少しいろいろ見聞を広めたいと思っています。